きずな

文化財保護センターだより

第20号　平成9年11月1日

財団法人　岐阜県文化財保護センター

〒500 岐阜県岐阜市司町1(岐阜総合庁舎内)　TEL058-264-1111(代)
FAX058-264-0343

●もくじ

表　紙　タイムスリップ探検隊……1
調　査　下有知・塚奥山・野首・湯屋
沖田遺跡発掘調査……2,3,4
行　事　見つけた！土器だ！……5
'97岐阜県新発見考古速報……6,7
声・記録　整理所紹介　センター日誌
あとがき……8

見つかるといいな

―タイムスリップ探検隊―

8月7日、関市下有知遺跡群において、第6回「タイムスリップ探検隊」を行いました。県内の小学5・6年生とその保護者14組29名が、遺跡での発掘体験と出土した遺物の洗浄及び拓本などの整理体験に取り組みました。初めての発掘体験で、土器に傷をつけてしまわないかとドキドキしながら作業をする姿や、土器片などを掘り出したときの子どもたちの歓声が印象的でした。

発掘調査状況　発掘調査着々と進む

当センターでは本年度、地元関係諸機関や多数の方々のご協力をいただき、県下14市町村14遺跡で発掘調査を実施しています。このうち５遺跡の概要についてお知らせします。

■下有知遺跡群（関市下有知）

関市内には、旧石器時代の赤土坂遺跡、縄文時代の塚原遺跡、弥生時代の重竹遺跡、古墳時代の陽徳寺裏山古墳群、白鳳時代の弥勒寺東遺跡など貴重な遺跡が点在しています。

今年度調査している「下有知遺跡群」は市街地の北約３㎞の高い丘の上にあり、その頂上からは南西側に開けた水田地帯を、また、遠くは伊吹山を望むことができます。

この遺跡の周辺には、５世紀から９世紀にかけての住居跡94軒などが検出された「檀ノ木洞遺跡」をはじめとする弥生時代から平安時代を中心とする遺跡がいくつかあります。

調査は、関テクノハイランド造成事業に伴うものであり、今年度は「砂行地区」を調査しています。調査は来年の３月まで行う予定です。

[住居跡群]

現在までの調査によって、約40軒の住居跡が確認されています。これらの多くは平地から見てとても高い丘の上に営まれています。住居跡は一辺が約５ｍの正方形で、急斜面を深さ50㎝ほど堀り込んだ竪穴住居と呼ばれるものです。

一部の住居跡を掘り始めたところ、弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけての土器が見つかり、このムラは何代にもわたって人々が生活していたことが分かってきました。

弥生時代より新しい時期で、このように高い場所に数多く住居跡が見つかるのは非常に珍しいことです。

竪穴住居跡の発掘調査の様子

[古墳群]

東西方向に伸びる尾根の西の端、標高93ｍほどの所に墳墓(注1)が１基見つかっています。この墳墓は東西の直径が約22ｍほどの円墳になります。墳丘面にはこぶし大ほどの葺(注2)き石があります。

今の段階では、はっきりした築造時期は不明ですが、今後、遺体が葬られている主体部を調査することにより明らかになるものと思います。

また、尾根の南側の丘にはこの円墳より時期の新しい後期古墳を３基確認しています。

確認された円墳表面の葺き石

[谷部の大溝]

調査区の西側の谷底には、最大幅８～９ｍに及ぶ大溝が南北に通っていたことが明らかになりました。最上流部では、岩盤から今も豊富な水が湧いています。

この大溝からは、弥生時代の終わりから古墳時代にかけての土器片、石器、木製品が多数出土しており、先に紹介した住居跡群に住んだ人々が、水汲み場などに使用していたものと考えられます。

出土した遺物の中には、双孔円盤と呼ばれる石製品や斎串と呼ばれる木製品も含まれていることから考えると、この溝で水の神に対する祭りが行われていたことを示すものとして注目されます。

掘り出された大溝（まん中の黒い部分）と出土した木製品

(注1) 墳　墓：遺体を埋葬したお墓
(注2) 葺き石：古墳の表面にしきつめられた石

■塚奥山遺跡（揖斐郡藤橋村）

揖斐川の最上流部、冠山のふもとの徳山地区にあるこの遺跡の調査も２年目をむかえ、次第にその様子が明らかになってきました。

この遺跡では、縄文時代の早期から後期までの長い間、人々が活動していたことがわかってきました。この中で注目すべき点は、縄文時代後期の後半（約3500～3000年前）の土器や石器が多く見つかっていることです。今までにも徳山の縄文時代の遺跡から後期の土器や石器は出てきていますが、これほどまとまって見つかるのは珍しいことです。これらの土器の中には、西日本や北陸地方によく見られる文様や形を持つものが多く、これらの地方と徳山の間に交流があったことを示しています。

下の写真の土器もその一つで、この土器は注口土器とよばれ、やかんのような形をしています。その形からわかるように、液体を入れたものと考えられます。この土器は、ほぼ完全な形で掘り出されました。

ほぼ完全な形で掘り出された注口土器

この遺跡では、人が石を集めたり並べたりした跡（配石遺構）が、数多く見つかっています。その中には、火をたいたり、何かを埋めた穴の上に置いたりしたものもあります。さらに近くからは、地面に埋められた土器（埋設土器）が見つかりました。現在、これらの一部は、墓ではないかと考えています。

また、竪穴住居ではないかと考えられる遺構が見つかっており、その中から出てくる土器や石器を慎重に取り上げながら、調査を進めているところです。

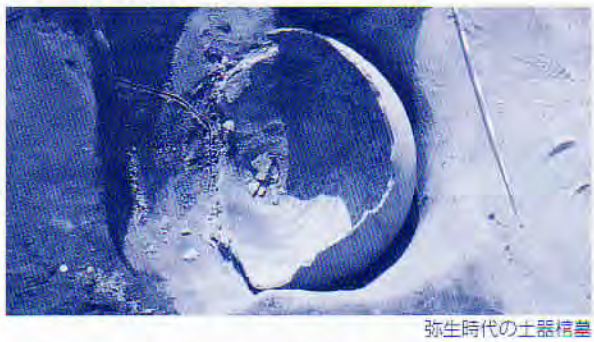
■野笹遺跡（美濃加茂市）

この遺跡は、美濃加茂市野笹町にあり、木曽川がつくった河岸段丘(注3)の上にあります。岐阜市と愛知県豊田市を結ぶ国道248号線の新しい道をつくるために、昨年（1996年）から調査をしています。

今までの調査で、昔の人たちが使っていたゴミ穴・溝のほか、住居跡が27軒見つかりました。

住居跡の使われていた時代は、縄文時代中期（約4000年前）のものが２軒。弥生時代の初め頃（約2200年前）のものが１軒。古墳時代の初め頃（３～４世紀）のものが１軒です。あとの23軒は古墳時代の終わり頃（６～７世紀）のもので、この頃野笹遺跡には多くの人々が住んでいたことがわかりました。

そのほか、直径約60cmの穴の中に、穴とほぼ同じ大きさの弥生土器の壷（口がせまくて胴体がふくらんだ器）をまっすぐ上向きに置いて埋めたものが見つかりました。壷の入った穴は、それよりも新しい時代に掘られた３つの穴に削られていて、壷も約半分が壊れていました。



弥生時代の土器棺墓

この土器の中からは、土や土器のかけら以外のものは何も確認できませんでしたが、中に死んだ人の骨を入れて埋葬した墓と考えられます。

このような土器の中に亡くなった人の体や骨を入れて埋葬された墓を土器棺墓といいます。土器棺墓は、縄文時代の終わり頃に、甕（口が広く底の深い器）を使ってつくられたものはたくさん見つかっていますが、弥生時代の壷を使った土器棺墓は、岐阜県内では他にあまり例がありません。

また、この土器棺墓がつくられた時代とほぼ同じ時代の住居跡が１軒見つかっています。住居と土器棺墓の間は、約30ｍ離れています。

(注3) 河岸段丘：川の片側または両側に広がる階段状の地形

■湯屋遺跡（益田郡小坂町）

この遺跡は、益田郡小坂町湯屋にあり、小坂川の支流大洞川右側の段丘の上に位置しています。以前から縄文時代の遺跡として知られていました。昭和63年には、道路拡幅に伴う発掘調査で、縄文時代中期の竪穴住居跡が数軒見つかっています。

今回の発掘調査は、湯屋温泉線道路改良事業に伴うものです。現在までの調査では、縄文時代の竪穴住居跡は未確認ですが、ピット（小さな穴）や土坑（やや大きめの穴）が合わせて200基以上見つかっています。土坑には、人の頭ぐらいの大きさの石が入っていたり、立石を伴うものがあったりで、土壙墓(注4)の可能性もあります。

出土遺物は、縄文土器や石器類です。縄文土器は、縄文時代中期後半と後期後半のものが多く、晩期のものも少しあります。中でも、後期後半に東北地方に分布の中心がある瘤付土器の出土が注目されます。

石器類としては、石鏃、石錐、石匙、打製石斧、磨製石斧、石錘、磨石、凹石などです。さらに、下呂石のフレイク(注5)などが多く出土しています。

また、土製品として、土偶や耳飾りが出土しています。

湯屋温泉街の中で進められた発掘調査の様子

湯屋遺跡から出土した瘤付土器

昭和63年の発掘調査によって、湯屋遺跡は縄文時代中期の集落遺跡と考えられていましたが、今回の発掘調査では、縄文時代後期後半から晩期にかけての遺物が比較的多く出土している点と、今回の調査地点が集落の中の墓域であった可能性が注目されます。

■沖田遺跡（益田郡萩原町）

沖田遺跡の発掘調査の様子

この遺跡は、益田郡萩原町の南の端、西上田にあり、飛騨川右側の段丘の上に位置しています。

昭和10年の開田工事や昭和48年に行われた萩原町教育委員会の発掘調査によって、縄文時代早期や中期の遺構・遺物が確認されています。

今回の発掘調査は、県営土地改良総合整備事業に伴い、昭和48年の発掘調査地点に隣接する450㎡を調査しました。

その結果、縄文時代中期（約5000～4000年前）の住居跡２軒と近世の掘立柱建物跡１軒が見つかりました。

縄文時代の住居跡のうち１軒は、いっしょに出土した土器などから縄文時代中期前半のものと思われます。また、掘立柱建物跡には、直径約40㎝の柱穴の底に平たい石が置いてありました。柱穴は２m間隔で並んでいます。

出土した遺物は約4000点で、縄文時代中期の土器から中世・近世の陶磁器類が出土しました。

さらに、地表面から120㎝下に「アカホヤ」とよばれる火山灰層が確認されたことは興味深いことです。アカホヤ火山灰は約6300年前に九州の南海上で噴火した火山によるものです。

この遺跡は河川の堆積によって形成された砂地の上に立地し、縄文時代以降、人々の生活の場として利用されていたことが明らかになりました。

（注4）土壙墓：遺体を埋葬した穴
（注5）フレイク：石のかたまりから剥ぎとられたかけら

行事

“見つけた！土器だ！”

第6回　タイムスリップ探検隊を終えて

発掘したことも土器にさわったことも初めての親子１４組のみなさんが発掘体験を行いました。

今年度は、２日間雨で延期になり、都合で参加できなかった方がいましたが、参加できた親子は土器を見つけると「見つけた！」「土師器だ！」と流れる汗も忘れて取り組みました。

午前中、発掘体験と出土した土器の洗いを下有知遺跡群で行った後、午後は中濃西高等学校で土器の拓本とりを行いました。

ここに、探検隊員の感想を紹介します。

拓本とりを行う探検隊員

私は以前、本を見て発掘をしてみたいと思っていたので、今日ねんがんの発掘ができたので、うれしかったです。そして、発掘を始める時、傷をつけてしまわないかとドキドキしました。大きい土師器というものがでてきた時、とてもうれしかったです。

ひとつ分からないことは、縄文時代の人はどうやって土からものができることを知っていたのかということです。土器にはどんな種類があるのかも知りたいです。親切に優しく教えてくださってありがとうございました。

岐阜市立則武小　　６年生

土器を探していた時、根にひっかかって、なかなか掘ることができませんでした。30～40分ぐらいたち、やっと「たかつき」という土器が見つかりました。一つ見つけるのに30～40分かかったので、こういう仕事は大変だということが分かりました。

水洗いをすると、模様が出てくるものもあればないものもあり、遊んでいるような気がして楽しくなりました。

関市立下有知小　　６年生

本日の探検企画について皆様の心遣いを非常にありがたく思いました。もっとアバウト的に考えておりましたが、学習的に大変おもしろかったです。皆さんのお世話のもと、楽しい面ばかりを経験させていただきました。

実際に土を掘り返してみて、日頃身近にある畑なども少し見方が変わったように思います。古代の人々の営みを探ることのおもしろさ、未来にそれを残す大切さを考えさせられました。

美濃加茂市　　保護者の方

初めての発掘体験を大変有意義に過ごすことができました。灰釉陶器を子どもが見つけたときは一緒に喜んでくださって感激しました。大変なお仕事ですが、ある意味で地味で神経をおつかいだということもよく分かり、職員の皆さんの熱意に支えられて作業が完了していくのだと思いました。

今の私たちの方が物が豊富で豊かな生活をしているようですが、土器の模様を見ていると、当時の人々は、物は貧しかったけれど心豊かな生活をしていたのではないかと思います。物は豊かでも心が貧しい今の時代を反省する材料にしたいと思います。

川辺町　　保護者の方

'97 岐阜県
新発見考古速報

県下発掘調査目白押し、28市町村72遺跡

行事

── 平成9年度岐阜県下発掘調査報告会 ──

平成８年度は、岐阜県下の28市町村72遺跡で発掘調査が行われました。その調査結果を交流する「'97岐阜県新発見考古速報」が７月19日高山市市民ホールにおいて行われました。飛騨地方での開催は今回が初めてです。

また、当日は早川万年岐阜大学助教授により「岐阜県下出土の墨書土器」と題する講演があり、150名あまりの参加者は報告者の説明や講演に熱心に耳を傾けていました。

会場の様子（高山市市民ホール）

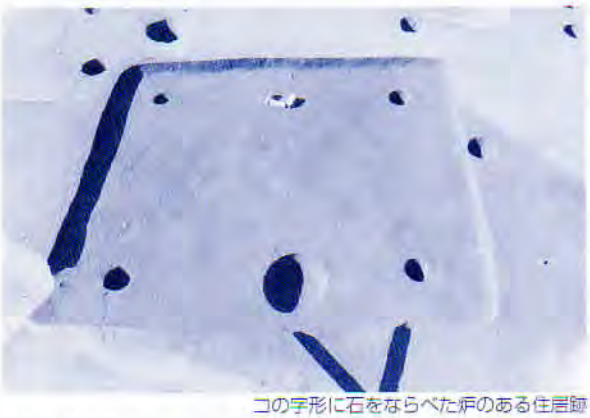
■藤ノ木遺跡（吉城郡国府町木曽垣内）

国府町教育委員会　押井　正行氏

古墳時代前期から平安時代までの61軒の住居などの建物跡が発見された。４世紀後半から５世紀前半（古墳時代前期）の住居跡が20軒、５世紀中頃（古墳時代中期）のものが30軒、奈良時代から平安時代にかけてのものが11軒である。

５世紀前半の住居跡ではコの字形に石を並べた炉が、５世紀中頃の住居跡ではかまどが使用されていた。

また、竈の脇からは北陸地方から運ばれてきたと考えられる「製塩土器」が発見され、古墳時代中期に北陸地方と交流があったことを裏づける貴重な資料となった。



コの字形に石をならべた炉のある住居跡

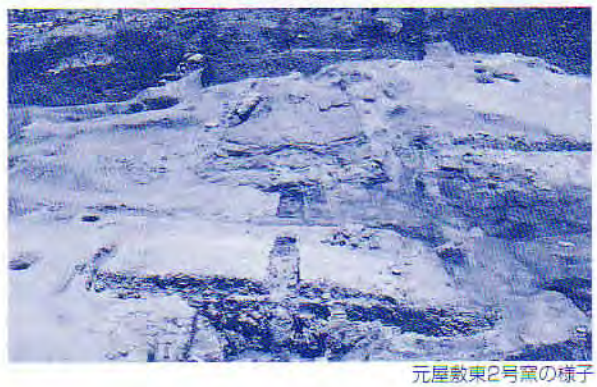
■元屋敷窯跡（土岐市泉町）

土岐市教育委員会　林　順一氏

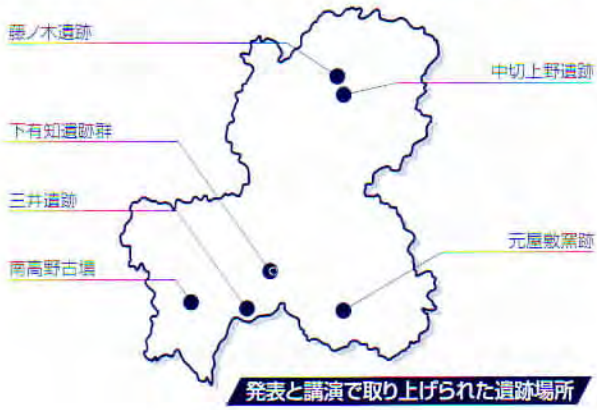
織部の名品を生産した国指定史跡の連房式登窯元屋敷窯に隣接する地点で、元屋敷東１号～３号窯の３基の窯跡の調査を行った。いずれも連房式登窯より古い「大窯」という形態である。

元屋敷東１号窯は16世紀後半から17世紀初頭にかけて、２号窯は16世紀後半に、生産活動が行われていたと考えられる。３号窯は２号窯を壊して作業場としていたことから、これに続く時期のものであると考えられる。

大窯で焼かれた天目茶碗、黄瀬戸、瀬戸黒、志野などの段階から、連房式登窯で焼かれた織部から御深井釉の段階までのものが出土し、美濃焼の生産活動を知る貴重な資料が得られたと言える。



元屋敷東2号窯の様子



■南高野古墳（揖斐郡池田町）

岐阜県文化財保護センター　飯沼　暢康氏

二ノ井遺跡の発掘調査中に発見された地中に埋もれていた古墳である。墳丘の大きさが直径約22ｍで、石室は長さ10ｍ、横穴式石室をもつ円墳である。死者を埋葬した玄室内壁にはベンガラと呼ばれる赤色の顔料が塗られていた。

石室内からは鳥の形をしたつまみの付いた蓋など須恵器64個体をはじめ、馬具や太刀などの金属製品が非常に良好な状態で大量に出土し、当時の埋葬の仕方などを探る上で貴重な資料となる。

古墳の構造、出土した遺物などから推定して６世紀後半頃造られたものと考えられる。

古墳の構造には、近畿地方の影響とこの地方独自のものが見られ、池田町周辺の後期古墳のあり方を探る上でも重要な発見といえる。

出土した馬具と鳥形のつまみの付いた蓋

■中切上野遺跡（高山市中切町）

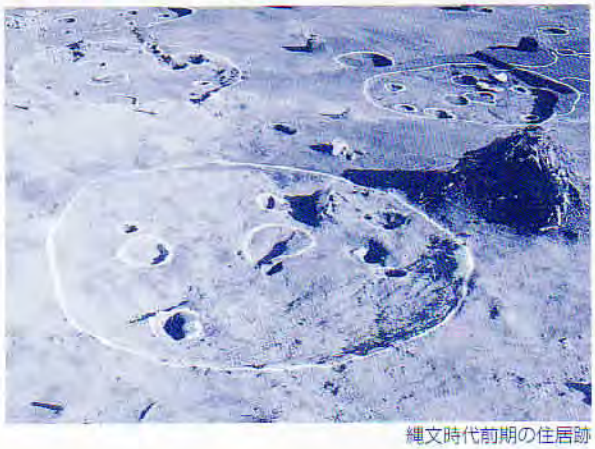
高山市教育委員会　田中　彰氏

高山市の北方山腹の緩やかに傾斜する山林部に位置する、古くから知られた遺跡である。

発掘調査によって縄文時代前期後半の住居跡15軒が発見され、この時期の遺跡としては県下最大の規模となる。住居のほぼ中央には地面で直接火をたいた跡（地床炉）が見られた。

土器では縄文時代前期の特徴的な浅鉢などが多量に出土し、漆塗と思われる着色された土器もある。また、石製品では長さ60mm、直径15.5mmの大型の滑石製管玉が出土している。

関西系文化の影響を受けた土器と関東系文化の影響を受けた土器の両方が出土し、東西文化の流入という点で飛騨地方の縄文時代前期を探る貴重な資料となる。



縄文時代前期の住居跡

講演・「岐阜県下出土の墨書土器」

岐阜大学助教授　早川　万年氏

☆墨書土器の出土数が増加し、これまで知られていなかった古代人の生活や精神性に光が当てられるようになった。県内出土の墨書は現段階で130点である。今後の増加が期待される。

☆各務原市三井遺跡出土の墨書土器に書かれた「東」という文字は何を意味するのか。文字は住居跡の竈内から出土した坏に書かれている。文献資料から東は竈神に通じ、竈を損壊することで竈神を封じ込める際に東と書かれた土器が使われたことが考えられる。

☆関市下有知遺跡群では、「大工」と書かれた墨書土器が出土している。「大工」は律令制下では中央政府の技術官の長を意味する。中世以降に広範な職人の意味で使われるが、この土器が使われた古代では地方の役所の技術官を意味する。この土器が出土した遺跡近くに官営工房があった可能性が考えられる。

☆墨書土器は文献と考古学を結ぶ接点である。文字を表した人々の意識を探り、遺跡の性格や地域の行政上の位置づけなどを探る貴重な資料である。

20号 きずな
平成九年十一月一日発行
文化財保護センターだより

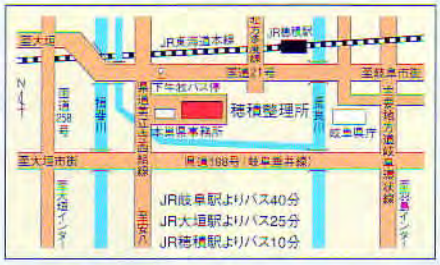
整理所紹介　1

センター最大の「穂積整理所」

センターでは、遺跡を発掘する仕事と、発掘した遺物などを整理し報告書にまとめる仕事があります。7か所の整理所に分かれて整理をしています。今回から数回に分けて整理所の紹介をします。

岐阜駅より車で西に３０分。近くに犀川、長良川、揖斐川が流れ、周りに田んぼが多く見られる中に穂積整理所はあります。

穂積整理所の全景



センター日誌

6.18　関ヶ原町文化財審議委員小山氏、野上遺跡視察
19　皇学館大恵良教授、文字資料指導　本部整理所
27　関市教育長・同文化課長・中濃西高校職員、下有知遺跡群視察
30　安城市歴史博物館岡安氏、野笹遺跡視察
　カクシタレ遺跡出土「水さらし場遺構」、丹生川村移転
7. 1　教育センター研修（参加職員１２名）下有知遺跡群
10　岐阜大早川助教授、下有知遺跡群指導
　富山大宇野教授、顔戸南遺跡指導
12　現地説明会　沖田遺跡
16　国立歴史民俗博物館設楽氏、大垣市教委鈴木氏、
　穂積整理所視察
19　県下発掘調査報告会　高山市
　市町村埋蔵文化財担当者、飛騨出張所視察
22　大垣市立北小校下文化財愛護少年団体験発掘　塚興山遺跡
　揖斐川町立北和中生徒体験実習　揖斐川整理所
　穂積町立穂積中生徒職場見学　穂積整理所
　名古屋大渡辺教授、飛騨出張所指導
23　高山市・吉城郡小社研３０名、飛騨出張所視察
28　丹生川村岩垣内遺跡試掘調査
8. 4　高山市内中学校職員、飛騨出張所見学
　湯屋遺跡発掘調査開始
　高山市中社研１４名研修、飛騨出張所
7　タイムスリップ探検隊　下有知遺跡群
　美濃加茂市立東中生徒職場体験実習　野笹遺跡
19　岐山高郷土研究部職員・生徒９名、下有知遺跡群視察
20　恵那市教委三宅氏、顔戸南遺跡視察
21　愛知県佐織町教委石田・宮川氏、下有知遺跡群視察
25　沖田遺跡整理作業開始
27　第５回基礎講座（岐阜総合庁舎ほか、～29日）
28　各務原市埋文セ渡辺氏、下有知遺跡群視察

事務棟と作業棟５棟の中に、調査員８名、補助調査員２名、作業員３７名の大所帯である当整理所は、センターの整理部門の中核を成しています。

CCDカメラ撮影の様子

今年度は、藤橋村徳山の２地点、大垣市の今宿遺跡、各務原市の船山北古墳群、池田町の二ノ井遺跡の５つの現場を担当しています。

作業効率向上のため、いろいろな機器を取り入れています。パドラス、マイプンスコープ、ＣＣＤカメラといったコンピューターなどを利用したものです。

調査員と作業員が力を合わせ、よりよい報告書の刊行を目指しがんばっています。

整理作業の様子

あとがき

「あったよ」と大きな声があがりました。うれしそうに少年が、手にした土器の破片を上げています。８月に行ったタイムスリップ探検隊での一コマです。小学５・６年生と保護者の方に発掘や遺物整理の体験をしていただきました。

また、この夏休みには、昨年以上に多くの中学生や高校生の皆さんが職場体験に訪れました。将来を担う若者を前に職員の話にも力が入りました。

以前にも増して、発掘調査に興味・関心が高まったり、埋蔵文化財保護に携わる仕事への理解が深まったりしていることを実感するとともに喜んでいます。